

社会医学の一分野としての農村医学

富山県農村医学研究会

会長 豊田文一

最近発刊されたB.ラマツイーニの著(働く人々の病気——労働医学の夜明け：1700：松藤元訳)の序文に次のようなことが書いてある。病人自身および病人を看護するものから多くのことを聞かなければならない。

「病人のそばにいる時には病人の具合はどうか、原因は何か、通じはどうか、どんな食物を食べているかを聞かなければならない」と医聖ヒポクラテスは、その疾病論で述べているが、この質問にもう一つ、すなわち「職業は何か」という質問を私は付け加えたいと述べている。ラマツイーニ(1633-1714)はイタリアのバドバア大学の教授で、各種疾病と職業のかかわりあいについて叙述している。数十種類にわたる職業をとりあげ、個々の職業とその周辺的环境について問題を提起している。もとよりヨーロッパにおける産業革命以前のことであり、中世紀頃のもろもろの職業であり、その内容も当時の産業労働を眺めながら書かれたもので、古典的にもみえるが、現在の労働衛生の濫觴といってもいい。しかも労働者自身の健康の破綻は、その環境に災いされて起こる様相が如実に画かれている。

「疾病と健康の背後に地域環境がある」という言葉は、今や常套語となっているが、ともすれば忘れられ勝ちである。ただひたすらに疾病のみに身も心も奪われ、人間そのものに対しての考慮は等閑視されているきらいがある。

私どもは、富山県農村医学研究会設立の目的を、ここに求め、学術的、実践的、社会的意義を含めてヒューマニティを底流として、活動が続けてきた。故に単に医学とそれに関連するものばかりでなく、幅広い分野の人々とともに衆知を結集し、十数年の歩みが続けてきた。農村医学は社会医学の一分野を形づくっていることは、すでに日本医学会の第50分科会として広く認められている所であり、医学という科学は人間社会に幸福をもたらすことが最大の目的である。そのためには周辺の科学と十分な結合をもち、人間の悩みと喜びというものは、どのようなものであるかを解明してゆかねばならない。従って私ども会員は、科学と人間の整合という主題をかけたて、ささやかであるかも知れないが、その目的に向って努力を続けたいと思う。